

● 事例 ●

# 素人集団による学生支援

## 〈名工大の試み〉

山下 啓司

(名古屋工業大学教授 学生なんでも相談室)

### 一、はじめに

本稿では、心理学に関わることのない工学部教員と職員という素人集団が手探りで作り始めた学生相談システムを紹介することで、一番大事な支援者のこと、そして作り上げた仕組みにおける工夫と、そこに介在する問題点を論じたい。

### 二、一 本学の学生相談

本学の学生相談が始まったのは、広中レポートに動かされ、各大学が学生の目線に合わせた教育に取り組もうと動き始めて少し間をおいた平成一四年の正月であった。本学

は工科系単科大学であり、学部学生四五〇〇名、院生一七〇〇名の総勢六〇〇〇名強の学生に対し、教員三五〇名、職員一九〇名という、対教員学生数が異常に多く、かつ、心理系の専門家は皆無に等しく、精神科医を学医に擁しているだけの学生支援弱小大学であった。平成一四年正月に学生なんでも相談室を立ち上げたものの、二年間は閉古鳥の鳴く有様(年間三〇件程度)。相談室の場所の問題とか、開室時間だとか試行錯誤の連続であったが、結局改善されることは無く、「やはりうちの大学の学生はそれなりに満足しているのだ」という、呑気なコメントを残す執行部もいた。そんなはずがあるわけがない。

平成一六年に相談室を任せられ、まずは小さなことではあるが、大胆なシステム変更を行わせてもらった。これまでの学科選出の順番制である相談員には辞めてもらい、こちらからこの人というマインドを持った教員に直接お願いする一本釣りでの相談員を選出したのである。大したことではないが、各学科の主体性を無視する気合いの要る変更であった。先生方にとって、この相談員という役割は、その当時は本当に大したことのないことであつたのが幸いしたように思う。学科の利害が絡まないもので、「じゃあ、勝手にやったら!!」といった感じであつた。

あとは、部屋の場所をこれまでの裏通りから、一番学生の目に付く学生センターの真ん前に移したことである。これまでの発想とは少し逆で、入り易いこと、相談しやすいことに力点を置いたのである。これだけのことにより、相談件数は年間七〇〇件超に急増した。入り易い受付に最適なインターカー（世話好きなおじさんとおばさん）を置き、気楽に話を聴いてもらうことのできる相談員や各相談システムへの振り分けを行ってもらつた。そして、各部局（学科、専攻）のキーパーソンとの有機的な繋がりを大事にする、これだけであつた。その後GPなどの外部資金を基に、臨床心理士に常駐してもらい、年々相談件数を増加さ

せ、平成二〇年度において遂に一〇〇〇件を超えるまでに至つた。

## 二―二 工業大学の問題点と利点

工業大学といった環境の中で学生相談を受け入れやすくするためには、どういった攻め方が必要なのか、随分と考へさせられた。学内の教員のほとんどが工学・理学博士、教育よりも研究が主体で、学生を使うことは得意でも、学生の声に耳を傾けることなど、やはり苦手な教員（研究員？）が多い。そんな人材の中から相談員を探し出すことなど至難の技で、同じ匂いのする人材を求めて学内を彷徨うはめになった。それは事務系職員でも同じことで、臨床心理士を雇い入れることができればよいのだが、定割のしわ寄せは最初に事務方に押し寄せており、とても学生相談に特化した人など望めないのである。

しかしながら、この教育現場は、教員と学生、そしてこの環境で育つた事務方の思考ベクトルが揃っており、攻め方を考えるのにはかえって容易い、総合大学では為し得ない環境だったのである。例えば、工学部教員はデータを一番重んじる、すなわち実験事実裏付けられた言葉しか信じない人種である。でもそれは逆にデータさえあれば、と

でも気持ち良く納得してくれるのである。ハラスメント騒動などにおける学生の研究室移動などは、ボタンをかけ違えないように、誰の所為でこうなったとか原因を追及するのではなく、今学生がミスマッチで動けなくなっていることを問題とし、「このことは学生にとっても、指導教員にとっても、不利益をもたらすわけだから、研究室の変更をしましょう！」と勧めると、とてもスムーズに動き出すのである。

もうひとつは、本学の教員は教育学・心理学面では素人であるということであった。それぞれのミッションは優れた研究成果を出すことであり、学生支援などという業績に繋がらないミッションにはあまり興味が無く「ヨロシク！」タイプの教員が多いことである。だから任せていただけなのである。

このように本学の学生支援は素人の集団であるが故の、問題点と利点を有しているのである。

### 二―三 学内で使えるツール

前節で述べたような状態であるので学生支援を進めやすいと言っても、相談室の少ない人材だけで進められるものではない。学内の人材をどうやって使うか、ここが最重要

ポイントである。工学部教員が業績至上主義者であるがごとく述べてはきたが、もちろん教員としての資質を十二分に持ち合わせている方も多くみえる。特に本学出身者の教員は、本学の位置取りの理解も明確であり、何より学生が後輩であるという気持ちを強く持つておられる。ただ学生支援に力を振り分ける余裕が無いだけなのである。逆に、業績至上主義の先生方にはそんな面倒に付き合っている暇はないのである。そこを上手に利用させていただくのである。

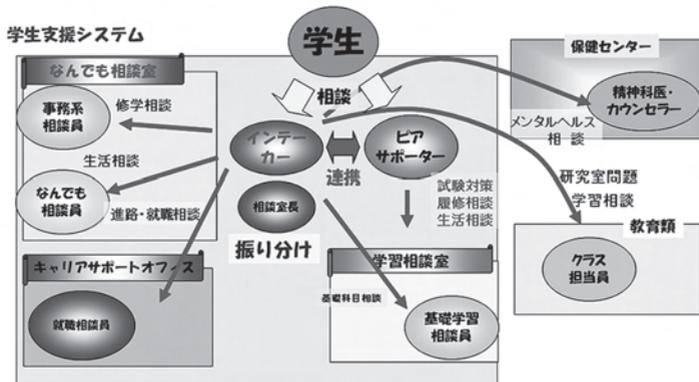
事務系職員も然りである。大学職員でありながら、部署によっては殆ど学生と接するチャンスの無い職員も多く、学生への対応が下手な方、中には学生への応対を怖がる方もみえるのである。適材適所ではあるのだが、事務系職員の活用は教員には難しく、時間が過ぎるのを待たねばならない時もあつた。そんな中で、援助者として隠れた素材である学生を活用するに至るにはそれほど時間を要さなかつた。

いずれにしても、人もお金もかけることの許されない現場では、使える人材使えない人材を的確に判断して、使える人材に存分に働いて頂くことが肝要である。向いていない人材には邪魔をされないようなシチュエーション作りを

心がけた。

二一四 最も重要な存在・インターカーに求められる資質  
 先に最適なインターカーを置くと上述したが、本学に於いては、最適なインターカーを運良く置けたと言った方が正しいであろう。まず、相談室のインターカーは単なる受け付けではない。この入口が一番肝要なのである。そして教員がインターカーとなることは不可能である。だから先ずは最適な事務屋を見つけ出さなければいけないのであった。しかしながら、先程述べたように、事務組織の人事に取り入ることは非常に難しく、一番初めにこの改革を一緒に始めることのできた事務屋が、インターカーに最適な人材であったことが、本学の相談システム構築には幸いしたのだと思う。学内の教員のことをよく知り、Keyパーソンを嗅ぎ分けることができ、そして、学務関係のシステムに精通していること。山下と一緒に相談室改革に乗り出した学務課係長は、本部に移るまで、色んな学科の事務組織を渡り、本部事務に移って学務関係の要所に籍を置いていた。そんな人と、学内に二〇年も籍を置き、教員組織に渡りを付けることの得意な室長とのコラボレーションで、この相談システムを稼働させ、図に示すような学内学

## 名工大の学生支援システム



(図)

生支援システムを連携させる構図が出来上がったのである。

### 三―一 学生相談の中の学習相談

これら学生相談を通して痛切に感じたことは、修学面での躓き<sup>つまずき</sup>によって多くの学生が苦しんでいることである。留年して卒業が遅れるぐらいいならまだしも、そのままメンタル不調に陥り、人生に落第しかかっている学生を目の当たりにして気付いたことが学習相談の必要性であった。一昔前の学生には考えられないことである。大学教員からしても、そんなことまでして教える必要などないのである。見もいまだに強い。

そんな経緯で、学生相談室をリニューアルして一年後に学習相談室の開室に至った。各学科より学習相談員を選出（ここは一応先生としての本業である教育であるので、中々こちらの一本釣りとはいかなかった）していただき、全学学生に周知した。ところが初年度の年間相談件数はたったの三件であった。何だったのだろうか？ 学生が修学面で躓<sup>つまず</sup>いていることは自明であったのに。考えられることとしてはやはりシステムの問題、援助者の問題であろうと思われる。全く前回の反省がなされていなかった。学習相談位ならばと、学科にその選出をお任せしたのが効いたよ

うである。事務的に選ばれた先生が研究室で待っていても、学生は利用できないのであった。先生の敷居は高いのである。そこで考えついたのが、先輩による学習相談「先輩のいる学習室」、いわゆるピアサポートシステムであった。

### 三―二 もう一つの支援者・学生

学生相談から浮き彫りにされてきた学生の就学問題、その支援の担い手として本学では大学院生によるピアサポートシステム「先輩のいる学習室」が稼働している。

学生支援におけるピアサポートの重要性は大きく認識され、数多くの大学で試みられている。一般的に全国の多くの大学で開室されているピアサポート室は、学生相談室の臨床心理系の教員が中心となり、サポーターの学生に数多くのカウンセリングに関する研修を経験してもらった後に、活躍してもらっているシステムが主である。ところが本学では、前述の学生なんでも相談室の相談員がそうであったように、担い手である大学院生はカウンセリングとは無縁の技術者を目指す学生なのである。ただし、カウンセリングでは素人な彼達も、後輩のことを大事に想う気持ちには総合大学と変わりない。さらに、カウンセリングには素人であっても、数学や科学の分野では専門家の卵なのであ

る。本学のピアサポートシステムの成り立ちからして、後輩たちの家庭教師役として勉強を教えることができればそれで十分なのである。また、そういう目的に特化すれば、文・理入り混じった総合大学では簡単に為し得ない（文学部の学生に微積は教えることはできないであろう）、学習相談主体のピアサポートは本学では簡単に行えるのである。本学のピアは設立当初から、単なる面倒見の良い、兄貴姉貴の集団として稼働し始めたのである。

平成一八年から本格始動に至るわけであるが、その成り立ちには複雑であった。当初は前述通りの学習相談員のティーチングアシスタントとして、それぞれの研究室の大学院生が選ばれていたわけであったが、やはりそれでは機能しなかった。先生から頼まれただけであり、研究に忙しい中、ボランティア活動などやっておられないというのが実情であった。もちろんそれは今でも同じことではあるのだが。そこで、その中から有志を募り、核になる学生を見出し、その学生の周りに集う仲間を全学から集め、二〇名程のグループとして本学のピアサポートチームは結成された。平成二〇年度では、相談件数四〇〇件を超える他大学には類を見ない学習相談中心のユニークなピアサポートとなった。

#### 四 まとめ

このように、学生相談を組み立ててきて以下のことに気づかされた。

まず、その支援者に求められる資質とは、その支援者が教員であろうが、職員であろうが、はたまた学生であろうが、やはり一番に必要なのは、結局当たり前のことなのではあるが、自分の大事な教え子や、後輩のことを思う気持ちなのである。

そのうえで、適材を適所に使うマネジメント能力と、それを発揮することのできる環境が必要であることが分かった。

この事例紹介が、多くの大学関係者のみなさんに少しでも参考になることを祈念したい。